

## 〔論 説〕

### ブライダルサービスとキッチン

—わが国のキリスト教結婚式とウエディングチャペルに注目して—

今 井 重 男

#### 目次

1. 緒言
2. 婚姻形態と結婚式の系譜
  2. 1. 婿入婚から嫁入婚へ
  2. 2. 家の外で行われる結婚式の発生
3. わが国のキリスト教結婚式史
  3. 1. 明治時代のキリスト教結婚式
  3. 2. 新聞黎明期の記事に見るキリスト教結婚式
  3. 3. 大正から昭和時代初期のキリスト教結婚式
  3. 4. 太平洋戦争後のキリスト教結婚式
4. ウエディングチャペルとは何か
  4. 1. 「チャペル」と名の付く商業施設
  4. 2. ヴァージンロードの正体
5. キッチュの考え方
  5. 1. キッチュ論
  5. 2. ウエディングチャペルとキッチュ
6. 結言

#### 1. 緒言

結婚式や披露宴を利用の主目的とする建物・施設が全国にあまた点在し、それらがさまざまに連携しながら広範なブライダル産業が活動する。これは世界に類例を見ないわが国の特異な経済現象である。しかも、そこで行われる儀礼・儀式<sup>(1)</sup>、あるいはその建物・施設の独自性には、明治の開国後「一等国」たらんと倦まず弛まず西洋化に腐心し、移入・加工して出来上がった近代日本文化の「如何物感」<sup>いかもの</sup>が漂う。

今より遡ること一千年の11世紀末に、キリスト教会<sup>(2)</sup>の入り口で結婚式を行うように

(1) 今井(2014b)と同じく、本稿でも儀式は一定の作法や形式をもって執り行われる行事のこと、儀礼は慣習で整形された礼法や宗教によって一定の形式で行われる行為と解釈する。

(2) 教会という名称自体は元來集まりを指す。しかしことわりのない限り、本稿では便宜的に建物を指す語として教会を使用する。定義付けについては高橋他(1985)に基づき次の通りとする。教会は「神父が在住している教会の建物」、教会堂は「神父の在住していない教会の建物で、神父が定期的に訪れて祈禱を献ずる。教会

なった。1059年に始まり13世紀まで続いたといわれるグレゴリウス改革の典礼様式統制で、結婚式がキリスト教の秘跡<sup>(3)</sup>に組み込まれ、以来、結婚式はキリスト教会の神事として営まれる。本来、カトリックの教会で結婚式を挙げられるのは、二人のうち少なくとも一人がカトリック信者でなければならない<sup>(4)</sup>。カトリックを除くキリスト教各派の結婚に関する制約は緩やかだが、「キリストの体である教会は、二人の決意に立ち会い、その決意の背後にある神の恵みを明らかに示し、誓約の場を提供し、神の、そして二人に関わる家族と友人たちの、祝福と導きを願って式を執り行う」(日本基督教団、2006：91)のであり、すぐれて聖性の儀式といえる。

現代のわが国の結婚式スタイルは、キリスト教結婚式が人気を博する。こうした状況は90年代にそれまで主流であった神前式を超えて以来継続する。しかし、キリスト教信者数が人口のわずか2.3%の295万人(2015)<sup>(5)</sup>であることを考慮すると、現在主流のキリスト教結婚式は信仰の表明とはいえない。つまり、自覚的信仰の介在しない、しかしキリスト教を拠り所とした結婚式が拡大したのである。また、キリスト教結婚式で挙式する場所(会場)のほとんどはキリスト教会ではない<sup>(6)</sup>。ホテルや結婚式専門式場の建物内部にビルトインされた、あるいはそれらの敷地内に独立して建つ建物などで挙式を執り行うのである。本稿では、キリスト教結婚式を行う会場のうち、信者を持たず、礼拝などの典礼を行わず、結婚式のためだけのこの施設を「ウエディングチャペル」と呼び、同施設について論じる。詳しくは後述するが、キリスト教会としての機能を持たない、結婚式専用のチャペルはわが国独自の「宗教建築物」ともいえ、外国人はこれを異端視する。それにも拘らず、ブライダルサービスを消費する側・提供する側とも、拡げていけばブライダル産業全体で、ウエディングチャペルを礼賛し、受け容れ、そこでの挙式をキリスト教結婚式と呼ぶ。建築の専門家によれば、ウエディングチャペルは専門誌『新建築』よりも『商店建築』において紹介されるという(五十嵐、2007：150)。つまり、キリスト教結婚式は、商業施設で行う、キリスト教のイメージの消費活動ということになる。

果たしてこうした活動は宗教への冒涇とにならないのだろうか。また、いくらキリスト教宣教の歴史が浅く、人口に占める信者数割合も2.3%と少なく、すなわちキリスト教に慣れていないとはいえ、こうしたことがなぜ生じるのだろうか。ブライダル産業を研究する上で、これらわが国の特徴的な現象の考察は、新しいブライダルサービスを創造するために必要な作業といえよう。こうした問題意識に基づき、本稿では幾つかの視点からウエディ

と内外の造りが全く変わらないものもある」。

- (3) 秘跡( sacrament)は「イエス・キリストによって制定され、教会にゆだねられた、神の恵みを実際にもたらす感覚的しるし」(日本カトリック司教協議会:137)のことである。カトリックでは「キリスト教入信の秘跡」(洗礼・堅信・聖体)、「いやしの秘跡」(ゆるし・病者の塗油)、「交わりと使命を育てる秘跡」(叙階・結婚)に分類している(同書：149)。なお、カトリックと聖公会が秘跡と呼ぶのに対して、プロテスタントでは「礼典」と称し、洗礼と聖餐(カトリックの聖体)のみを一般的に礼典としている。
- (4) わが国のカトリック教会は、国内での結婚式に限って、二人とも非信者であっても、一定の要件をもとに教会で挙式できるよう、ヴァチカンの許可を得ている(詳しくは、脚注21を参照のこと)。要件の主なものは①初婚であること、②挙式前に司祭の面接を受けるか、教会の用意する結婚講座に二人で通うこと、③挙式に立会人(保証人)が2名出席すること、の3つである。
- (5) 「宗教統計調査 平成26年度」(2015年3月公表)によるキリスト教系信者数。
- (6) 「ゼクシー結婚トレンド調査2014」によれば、挙式実施者の55.5%がキリスト教式を選択しているが、教会(国内)で挙式したカップルは6.1%に留まる。

ングチャペルについて考察する。

本章に続く2章「婚姻形態と結婚式の系譜」では、わが国の婚姻形態が婿入から嫁入へ変化した経緯を浚った後、従前は家の中で執り行った結婚式が現代のそれと同じように家の外へ出た経緯を紹介する。3章「わが国のキリスト教結婚式」は、維新後にキリスト教結婚式がどのような形式で行われたのか、また市民に紹介されたのか、事典や新聞、グラフィック雑誌などの文献を渉猟し明らかにする。4章「ウエディングチャペルとは何か」では、この建築物とそこで実施される儀式の装置であるヴァージンロードについて、教義や聖書、典礼に照らし考える。そうした考察を踏まえて5章「キッチュの考え方」では、ウエディングチャペル着想のバックボーンや持て囃される背景をキッチュの概念を用いて概観する。ここでは、ウエディングチャペルで実施する儀礼の装置としてヴァージンロードもキッチュを通して考察した。そして、本稿の掉尾を飾る6章「結言」で、得られた知見と今後の課題を提示する。

## 2. 婚姻形態と結婚式の系譜

### 2. 1. 婿入婚から嫁入婚へ

わが国の婚姻形態を史的に紐解くとき、その形態が「婿入」から「嫁入」へ変化したというのが民俗学における定説である。「嫁入」、「嫁取」、「嫁迎」、「祝言」などの俗語が含意する、嫁が婿の家へ行く習慣が普及するのは室町時代以後であり、それ以前は先ず婿が嫁の家に行ったため「婿入婚」や「婿取婚」と呼ばれていた。これはその名が示すように、婚姻成立儀礼を嫁家で執り行い、その後の一定期間を嫁家に婚舎を置くもので、ある期間を経て嫁が婿の家へ移り住んだ。こうした婿入婚は奈良時代や平安時代の典型的な婚姻形態であった。

他方、嫁入婚は婚舎が婿家に置かれ婚姻成立儀礼も婿家で行う婚姻形態である。鎌倉時代に武家が台頭するとともに男性(婿)の地位が向上し、この婚姻形態へ変化した(今井, 2014b: 347)。そしてこれは室町時代以降次第に庶民の間にも広がり、江戸時代では最も一般的な婚姻形態として定着する。

婚姻形態の変化は、当然のこととしてそれに伴う結婚儀礼も変える。嫁入婚では、嫁の婿家への引き移りが「入家式」と呼ばれる儀礼<sup>(7)</sup>となり、晴れの舞台として華やかさが増した。この儀礼をわが国民俗学の創始者である柳田國男は「短い言葉で結論をいふと、婚礼というものは主婦の入家式、もしくは主婦試補の就任式であって目的は主として彼と四周の者との一族一家となる点に在った」(柳田, 1948: 230)とまとめ、後に主婦になるべき嫁という観念がその基礎にあるとした。また、わが国の女性史研究家で、女性解放運動の理論的指導者の高群逸江は嫁入りを「嫁取婚」と呼称し、この発現を婿取婚の終滅過程の反面と捉えた。嫁取婚の起こりについて「家父長制の確立につれ、私有財産の相続が必要となり、女性は性具や家内もしくは家事奴隷の面に加えて、相続者を生む生殖器の面でも必要とされ、『子なきは去る』という律令語がはじめて生きてきた」(高群, 1963: 209)と述べた。そして、現憲法が施行されるまで続いたと考えた。

(7) 嫁は婿家の勝手口から入り、台所入り口で酒や水を飲む儀式や、入り口で松明や藁束を燃やしてそこを通らせる儀礼など、地方や地域によってさまざまなものがある。

## 2. 2. 家の外で行われる結婚式の発生

鎖国を解き、明治維新を経て近代化が進む過程で、都市部には官吏、軍人、学者・学徒、サラリーマン…など新たな層が住むようになる。新しい住民達は、彼らがそれまで生活した農村地域の習俗に囚われることなく、したがって入家式に象徴される一族一家に組する結婚儀礼をする必要はなかった。加えて近代化は、結婚する相手を選ぶ際の、地理的な距離を伸ばし、身分階層や文化圏などを拡げた。さらに彼らの住む都会の住居は、地価が高く比較的狭隘で、近親者が集い結婚式を行う場所として適切でないことも多かった。こうした事情により、各種婚礼を総合化する形で近代の結婚式スタイルが整っていく。平出鏗二郎が1902(明治35)年<sup>(8)</sup>に著した『東京風俗志-下』には「家の手狭なるもの、あるいは騒々しきを厭ふものは、料理店・貸席などにて式を挙ぐるもあり」(平出, 2000:93)と読み、この時代に結婚式の外部化が始まっていたことが分かる<sup>(9)</sup>。

柳田は代表作『婚姻の話』の中で、「神前結婚など、いふ新案が行なわれるまで」(柳田, 1948:227)と記す。神前結婚が新しく創案されたスタイルであることの暗示である。明治時代にキリスト教結婚式が移入されるとともに、神道の国家宗旨化運動が綿い交ぜとなり、結婚式を神前で行う「神前結婚式」が整備された。神前結婚式を古式床しき日本の伝統的な結婚式と考えがちだが、実は明治中期に創案された比較的新しいスタイルである<sup>(10)</sup>。この神前結婚の成立過程に関する考察は緒論存在するが、本稿ではこれ以上踏み込まない。ここでは、明治時代に結婚式が家の外へ出たが、それはキリスト教結婚式が移入された時期と一致することを確認しておく。

## 3. わが国のキリスト教結婚式史

### 3. 1. 明治時代のキリスト教結婚式

明治政府がキリスト教を解禁したのは、1873(明治6)年2月24日である。当初維新政府は、尊王敬神が唯一の治道たるを考え、施政の初め全国各地に高札を掲げ江戸幕府の政策そのままに明白にこれを絶対禁止した。しかしこれに対する諸外国の反発は相当なもので、石井研堂がまとめた『明治事物起原』(増補改訂版, 1944)<sup>(11)</sup>の〔維新當初の耶蘇教〕によれば「実を言えば、外教制禁は、政府部内にて後悔事件なり、唯そうと告白し難く、鬼面を仮りて強く粧い居るに過ぎず」(石井, 1996:410)<sup>(12)</sup>が本音であった。あまつさえ1871(明

(8) 本稿での暦年表示は、西暦に続きカッコ書きで元号を併記した。これは時代のイメージを促すことを目的としている。このような目的に合わない判断した場合、また太平洋戦争終結後の記述は西暦のみとした。

(9) 原著は1902年発行。本稿では、原著を底本とした2002年の文庫本を参考にした。ここに「騒々しき」とあるが、これは結婚式後の披露宴を指した記述であろう。同時代には式後の披露宴開催が一般的となっていた。なお、1890(明治23)年創業の帝国ホテルでは、開業当時から結婚披露宴会場として利用されていた(帝国ホテル, 1990:283)。

(10) 明治初期に、神官が自宅に向いて行う結婚式(これを「宅行き」という)が始まる。期を同じくして、1873(明治6)年に神宮教院から刊行された『五儀畧式』で、神職の司式による神前結婚式が公となった。しかし、それが普及するのはその後数十年を要し、1901(明治34)年の皇太子(後の大正天皇)の神道式結婚式を経て、翌1902年に日比谷大神宮(現在の東京大神宮)において初めて神前結婚式が実施された。

(11) 原著は1908(明治41)年であるが、本稿では1944(昭和19)年発行の増補改訂版を底本とした明治文化研究会編集(1996年発行)版を参考にしてている。

(12) 元の資料は、「実を言えば」が「實を言へば」など、旧字あるいは旧仮名使いであるが、本稿では文意を損なわ

治4)年の岩倉具視の欧州視察では、「切支丹宗国禁止の一條につき、痛く外人の論難に遭い、電報にて本国に撤廢を申し来たりし」(石井, 1996: 410)ほどで、上述の通り1873年に至り「洋教のことは、人民既に熟知の事がらなれば」(石井, 1996: 417)と言い訳しつつ解禁に向かった。

政府の方針転換を知った欧米のキリスト教各派は、教勢拡大のため極東の新開地へこぞって宣教師を送り込む。そして都市部を中心に教会を開設し、各派典礼に則って宗教儀式を行うようになった。では、いつから教会で結婚式が挙行されるようになったのだろうか。教会で行われたと明言していないが、前掲『明治事物起原』の「新式結婚數様 (七) 歐式婚禮にて嫁入る」に「明治六年十月三日、長崎県榎木町出生磯部お平と云う十六歳の少女が、同地在留の支那人ペンテクといふ者に嫁入り、ペンテクは、シンガポール生まれなるが、英国に入籍せし者にて、其婚儀は、英国風なりし、日本婦女が欧州風の婚禮にて嫁入りしは、これが皮切り也とヘラルドの抄譯一五六号に見えたり」(石井, 1996: 109)の記述が読める。前述の通り、キリスト教解禁は1873年2月24日のことである。それから僅か7か月後の10月初頭では、教会堂建設はもとより信仰者獲得もあまり進んでいないだろう。よしんば「歐式婚禮」がキリスト教結婚式であったとしても、それがわが国の婚姻儀礼に与えた影響は限定的であったと考えられよう。

『風俗画報』は1889(明治22)年に創刊された本邦初のグラフィック雑誌である。同誌は「日本婚禮式」と題する特集号を、1894年～1896年にかけて計3号発行し、明治時代中期までの日本全国の結婚風俗を伝えた。1896年5月1日発行の『日本婚禮式下巻』で、記者近藤樂石がキリスト教結婚式を報告している。記者は「冠婚葬祭の大儀も或は欧米基督教國の風儀に倣ふ者あるに至れり記者は固より之を可とする者にあらざるも今回風俗畫報日本婚禮式を發行するに當り遍く婚禮の儀式を掲ぐる以上は獨り此のみを遺すべきにあらず<sup>よつ</sup>因て其實況を探問し左に記載して以て讀者の一覽に供す」と述べ、当時のキリスト教結婚式次第に沿って詳述する。入堂時にヴァージンロードを歩くことや誓いのキスなどの記述はないが、新郎が指輪を会師の時禱書<sup>(13)</sup>に置いた後、新婦の左手の無名指(薬指)に嵌めたとあり、キリスト教結婚式では当時より指輪を贈る儀礼が存在したことがうかがえる。

### 3. 2. 新聞黎明期の記事に見るキリスト教結婚式

続いて、明治初頭に相次いで発刊した新聞の記事を追い当時の状況把握に努めよう。1879(明治12)年に大阪で創刊した朝日新聞<sup>(14)</sup>の1881(明治14)年4月15日号に、「基督結婚清潔式」と見出しのついたキリスト教結婚式記事が載っている。川口居留地<sup>(15)</sup>の貿易会社キルビー商会で、内平野町(現在の大阪市中央区)の窪田氏と神戸英和女学校(現在の神戸女学院大学)生徒河村たき氏がキリスト教の結婚式を挙げた。記者大原象吉は、保証人

ない範囲で現代仮名使いに調整している。

(13) キリスト教徒が時課の祈りを捧げるために用いた祈禱書。

(14) 1879年に創刊後、1888年に東京へ進出し『東京朝日新聞』を発行した。翌年の1889年に『朝日新聞』は題号を『大阪朝日新聞』に改め、1940年の新聞統制による『朝日新聞』への名称統一まで『大阪〜』と『東京〜』の2紙が存在した。

(15) 川口居留地(現・大阪市西区川内付近)は、1868年の大阪開港と同時に設けられた外国人居留地。居留地設置後の1874年に大阪府庁が、1889年に大阪市役所が建設されるなど、1989年に居留地制度が廃止されてからも大正時代まで行政の中心地であった。

を立て、宣教師の演説や祈念式がある結婚式を「実に珍しき心地ぞせらる」と感じたものの、「基督結婚清潔式」と表記して好評した。また、その5年後の1886(明治19)年9月12日号では「洋式の婚姻」と見出しの付いた記事もある。これは、島の内千年町(現在の大阪市中央区島之内)のキリスト教会で行われた、同教会宣教師辻密太郎氏と京都同志社(現在の同志社大学)の教師高松せん氏の結婚式に関する記事である。親族および縁故者140～150名が参列した結婚式について、新郎新婦の誓いの言葉や2人の握手など式次第に沿う形で解説する。

この2つの記事に共通するのは、旧来のわが国の結婚式と比較して清潔・簡潔であり支持する、という論調である。1881年の記事は見出しで「清潔式」と称し、1886年のそれでは旧来の結婚式を「我国の婚姻法にて兎角無益の事の多くして」と表現した。後者は、たとえ賑々しく挙式したとしても離縁することもあり得るので「右等の法に依りて式を挙げ幾久敷うの挨拶をして長く忘る、事なくんば従来の弊害も自然除き去るにいたるべきか」と結ぶ。

キリスト教結婚式を扱った記事を、1881年以前に見えていない。しかし、朝日新聞創刊翌日の1879(明治12)年1月26日号の仏教結婚式を伝える記事に注目し、値する記述がある。記事自体は、日蓮宗の仏教結婚式の様子を伝えるのだが、冒頭に「耶蘇の教会に結婚まことの信を表す西洋風を模擬たの敷かと思へば・・・」といった一文が載る。これは、記者がキリスト教結婚式を何物であるか知っていたこと、またこの時既に国内でキリスト教結婚式が行われていた可能性を示唆する表記にほかならない。しかしわれわれは、新聞を基にしたわが国キリスト教結婚式の起源を惜しむらくはここまでしか遡れていない。

### 3. 3. 大正から昭和時代初期のキリスト教結婚式

『故實と新式日本婚禮式』は、1916(大正5)年に初版が刊行されて以来、1937(昭和12)年の著者交代を経て1942(昭和17)年まで発行された、大正から昭和初期の総合結婚指南書である。はっきりと明言できないが、発行期間が25年を超え、また版数も多いことから当時の指南書としては人気であったものと推察できる。同書の大正版(玉置一成著)では、各国の婚礼を解説する章の「アメリカ」、「ユダヤ」の節でキリスト教に関連する記述があるが、わが国のキリスト教結婚式の紹介は無い。昭和版(尾關方外著)<sup>(16)</sup>になって「洋式の結婚」としてその説明がある。式始まりの入場は、第一番に行列の通り道に花をまくフラワーガールが進み、次に結婚指輪を運ぶリングボーイが続き、その後新郎新婦が介添人とともに続く、と解説する。これは現代のキリスト教会で挙げる式の入場スタイルと同様で、わが国独自の解釈による儀礼は見つからない。

大正から昭和初期に盛んとなった生活改善運動は、衣食住の消費生活や、社会習俗・風俗全般について合理的改善を目指した。それは大衆社会に対する教育事業の1つであり、官民さまざまな団体が参加した官製運動であった。この運動は、第一次世界大戦に伴う好景気に沸き弛緩したわが国経済の引き締め、大戦後のヨーロッパで見られた生活合理化運動の伝播、さらには女性の中等教育や社会教育への注目の高まりなどに起因する。そうした世相の影響を色濃く受けて編纂されたのが『婦人家庭百科辞典』<sup>(17)</sup>で、家庭婦女子の啓

(16) ここでいう昭和版は、1937年発行1940年再版を参考にしている。

(17) 本稿は1937年に三省堂刊行の『婦人家庭百科辞典』を底本に復刻された2005年筑摩書房版を参考にした。編纂趣意に「生活の改善とは、光輝ある伝統を基礎とし、その上に時代に適応した新しい生活を建設することで

蒙を目的に三省堂百科辞書編集部より1937(昭和12)年に刊行された。同書は、これに先んじて1906(明治39)年に富山房が発刊した『日本家庭百科事彙』と競って家庭に具備された。五十音順に記された同書「け」の部に「けっこんしき(結婚式)」の説明が載る。結婚式の意味解説後、「家庭結婚式」、「神前結婚式」、「仏前結婚式」、「教会結婚式」、「新式結婚式」、「式服・髪飾」、「忌み言葉集」の順で記述される。もっとも多くの言葉を用いた説明は、当時の一般的なスタイルの「家庭結婚式」で、式の準備や順序、鬘斗の礼、三々九度と親類の盃について詳述する。なお、本稿が目する「教会結婚式」は、式の順序を概説しているが、現代と比較して特記すべき事柄は認められない。他方で「現今一部の教会では信者でなくとも希望に応じて行うところもある」と、太平洋戦争前に宣教の一環として非信者の結婚式を受託したキリスト教会の存在を示唆する興味深い記述がある。

### 3. 4. 太平洋戦争後のキリスト教結婚式

1945年の敗戦は、周知の通りわが国の存立基盤を根底から覆す大変革を惹起した。1947年施行の日本国憲法は、結婚は“両性の合意にのみ基づいて成立する”と高らかに宣じた。これとともに、家と家の結びつきを強調した結婚が退行し、個人と個人の意思による婚姻が望ましいとされるようになる。こうした時代背景を受けて、結婚式の新しい様式に、神道色を一切除去した、しかも新憲法の概念を反映した「人前結婚式」<sup>(18)</sup>が誕生する。敗戦による国家宗旨としての神道の否定、信者でもない者が神の前で結婚することの抵抗感などから、人前結婚式は合理的で流行した。しかし、定着せずに程なく不人気となる。人前結婚式は、セレモニーとして洗練されておらず、結婚儀礼としての魅力に欠けることが、その理由らしい(市川, 1988: 156)。

替わって台頭するのが神前結婚式であった。明治記念館をはじめとする総合専門結婚式場の誕生、1959年の皇太子(今上天皇)の結婚式、互助会系専門式場の全国展開などがそれに拍車をかけた。ベビーブーマーが婚礼適齢期を迎えた1970年代初頭に神前結婚式はピークを迎える。

他方で、キリスト教結婚式が、それまでの敬虔なキリスト教信者の結婚式という枠を超えはじめるのも時同じであった。1974年10月22日付朝日新聞に、軽井沢カトリック教会のカルロス・マルティネズ神父のインタビューが掲載された。キリスト教会での結婚式が世間に認識されるきっかけの1つとして、1972年の西郷輝彦と辺見マリの結婚式がある。神前結婚式が全盛の時代<sup>(19)</sup>、人気絶頂のアイドル同士が、軽井沢のこのキリスト教会

---

あり、生活の向上とは、花にたぐへられた国民精神を昂揚して、我等及び我等の子孫に、より崇高な志操を結実せしむることであり、生活の発展とは、あらゆる学問の進歩を拉し来ってこれを衣食住の上に応用することであらねばならない。しかも無限に範囲を拡げて行く今日の家庭生活に於て、家庭という一つの船を操って、常に大小の波を押し分けて進んで行かなければならぬ船長たる位置にある家庭の主婦には、またそれに応ずるだけの不断の覚悟と用意を備えて居なければならぬことは当然のことである」とあり、家事を守るのは主婦といった考えが滲む。

(18) この結婚式は、1951年5月に東京都立新宿生活館で始まったという。同施設は、戦後の結婚式場不足と個人住宅の狭小に対して、都民への福利厚生として設けられた。公共施設である以上、宗教に関わる便益に供することはできず、宗教色を廃した結婚式が誕生した。

(19) 石井(2005:30-32)は、全国結婚式場協会編『昭和・平成ブライダル総覧』(1992)や現在も調査継続中のゼクシィ調査を基に、1979年から2003年までの神前とキリスト教結婚式の変化を調べている。データのもっとも初期

で結婚式を挙げる。その様子はテレビや週刊誌でも取り上げられ、静かな森の中にある教会の名が知られるようになった。西郷と辺見の結婚に相前後して、軽井沢に縁の深い作家・芥川龍之介の三男である芥川也寸志、森山加代子、吉田拓郎といったタレントたちがこの教会で結婚式を行った。タレントの影響力は小さくなかった。マルティネズ神父によれば、同教会では多いときに1日7組、年間で500組以上の挙式が行なわれたという<sup>(20)</sup>。しかし、ここで挙式した多くは、キリスト教に共感したのではなく、タレントと同じ場所で、同じような方法で結婚式を挙げたいと考えたカップルであった。期を一にして、信徒数が拡大しない事情を考慮して、日本カトリック司教協議会が1975年に非信徒同士の結婚式の受け入れを「条件付き」で許可するようになった<sup>(21)</sup>。聖パウロ・カトリック教会でのタレントの結婚式を通して、キリスト教結婚式が広く認知されるとともに、信仰心に抛らない、一種の憧れのような結婚式の選択が確立してゆくのであった(今井, 2014a: 285)。

#### 4. ウエディングチャペルとは何か

##### 4. 1. 「チャペル」と名の付く商業施設

数多くの教会建築を手がける建築家で、キリスト者でもある香山壽夫は、自身の建築設計した聖アンデレ教会礼拝堂<sup>(22)</sup>(東京都港区)と聖リタ教会堂<sup>(23)</sup>(北海道北斗市)を引き合いに、ウエディングチャペルに対する考えを示した。「今日のキリスト教会堂について」(香山, 1997: 147-149)と題する小論の冒頭で、信仰を持った人々の集いが「教会」という語の意味で、そうした人のための建物が「教会堂」であると規定した後、教会堂を持たない教会は存在しても、信徒集団を持たない教会堂はあり得ず、もしそれが存在するなら「音楽を

---

1979年では80%が神前式、15%がキリスト教式であった。その後の1990年代中頃の神前式とキリスト教式の比率逆転、その要因などを考慮すると、本稿で取り上げた1972年の西郷・辺見の挙式の時代、神前式スタイルが圧倒的シェアを誇っていたと考えられる。

- (20) 一昨年、軽井沢へ研究調査に行った際、マルティネズ神父のインタビュー機会に恵まれ、「7組/日・500組/年」という話を伺った。
- (21) キリスト教の中でもとりわけ厳格な宗派であるカトリックは、最高意思決定をヴァティカンがくだす。したがって、この日本カトリック司教協議会の決定に関しても、当然問い合わせている。聖パウロ・カトリック教会では、開かれたキリスト教の信念の基に非信徒の結婚式を受け入れ始めた当初、波風を立てぬよう密かに挙行していた。しかし、タレントの結婚式がマスコミを賑やかしたことを契機に、所属する横浜司教区に相談し、それが日本カトリック司教協議会の決定につながったという。このように、1975年にヴァティカンの教皇庁教理省が日本国内に限定してお墨付きを与えたのは、軽井沢の小さな森の教会の行動に起因するのである。
- (22) 聖アンデレ教会は日本聖公会東京教区の主教座聖堂であり、香山の建築設計による現在の礼拝堂は1996年に竣工した。聖公会とは、「唯一の、聖なる、公同の、使徒的な(One holy catholic and apostolic)教会である」という意味で、ローマ・カトリック教会とプロテスタント諸教会(ルター派やカルヴァン派など)との中道(ヴィア・メディア)として、自らを位置づける。聖アンデレ教会は、キリスト教解禁半年後の1873(明治6)年9月に来日したアレクサンダー・クロフト・ショーが、1879年6月4日に開設した。ショーは「軽井沢の恩父」とも呼ばれ、維新後に宿場機能が低下し没落した軽井沢を再興した人物としても有名である。軽井沢とショーの関係については拙稿(2104a)を参照されたい。
- (23) 正式名はカトリック当別教会。1917(大正6)年トラピスト修道院の創立者D・ジェラルドが設置した。カッシーノの聖リタに捧げられた教会で、昔から地元では「リタ教会」の名で親しまれる。香山の建築設計による現在の協会堂は1995年に竣工した。



演奏しない建物をコンサートホールと呼び、美術品の展示されていない建物を美術館と呼ぶに等しい」と指摘する。その上で、教会堂を論じるためにこうした（信徒にとってあたり前のことの）説明が必要な理由を「今日の日本社会では、こうした虚言が堂々とまかり通っているからである」と厳しい筆勢で表現する。器が整えばそれでよしとする考えへの批判といえよう。また、香山は彼の友人であるアメリカ人建築家の、次のような反応を紹介する。有名な「教会建築」を訪ね、友人はその建物がホテル施設のウエディングチャペルであることを知り驚き、「建築の良し悪しを論じる前に、宗教が単なる結婚の風俗となってしまったことに、すっかり混乱してしまった」という。敬虔なキリスト者の香山は、十字架の装飾を施した、宗教活動を行わない建物を、チャペルやチャーチなど「教会」と名付け使用する日本社会を苦々しく感じたのだろう。

ウエディングチャペルのデザインは、西洋風が好まれる。さらに厳密に言えば、建物内部に常設するビルトインタイプのチャペルから派生した、独立した建物のその普及過程では、外見がゴシック<sup>(24)</sup>様式を模倣したものが多く見られた。建物が無くとも、建物に教会という名が無くとも宗教は成立する。正しい意味で宗教施設とは見なされないが、儀礼や文化と宗教が交りあい、その1つの産物としての大衆的呼称、それがウエディングチャペルだ。ウエディングチャペルと本物の教会堂が大きく異なる点は、そこに集う信者が居ないことはもちろん、宗教施設としての凜とした佇まいや経年とともに醸し出される風合いである。本物の教会堂は、信者とともに永い時を刻むことを前提とするが、ウエディングチャペルはプライダルサービスを提供する商業施設であるため、消費需要の続く限り存在すればいい。前出の香山も、こうした理解の基、ウエディングチャペルがチャペルやチャーチとして存在することに苦言を呈したのである。

#### 4. 2. ヴァージンロードの正体

前節で、信徒が集うのが教会で、その人々のために教会堂が存在する、と述べた。一方、結婚式を挙げるカップルのイメージの消費のためにウエディングチャペルは存在する、と書いた。次に、そのウエディングチャペルで執り行われる儀式について、それを行う装置を取りあげ考察を続ける。

具体的な事例に即して議論する。例えば、「ヴァージンロード」、である。信者がミサを執り行う教会堂以外の、ホテルや専門結婚式場に併設するウエディングチャペルで行われる結婚式に参列したことがある人なら、あれのことかと思当がつくだろう。一度も参列したことのない場合は無理かもしれない。しかし、参列こそしたことが無くとも、テレビドラマ、映画、あるいは友人知人の持つ写真などを通じて、祭壇前に立つ新郎のところへ新婦が歩む、あの道のイメージが全くないということは考えにくい。

そこで、あの道のヴァージンロードという名前と、その意味について考えてみていただきたい。大方が、大凡見当は付くが、もうひとつ明晰とならない、ではないだろうか。わが国のキリスト教結婚式の場、それが始まって最初のセレモニーが新婦入場である。参列者は、進行役から入場扉を注目するよう促され、開扉するとそこには腕を組んだ新婦とエスコート役の父親が立つ。一瞬間を取り一礼すると、2人は「ウエディングステップ」<sup>(25)</sup>

(24) ローマを荒廃させた北方民族・ゴート人への蔑称として、イタリア・ルネサンスの建築家がつくった言葉。

(25) 歩き出しやすい足から一歩進めたらもう一方の足を揃えて、次はもう一方の足から歩を進めて最初の足を揃

という歩調で入場する。そしてこの入場時に歩む道がヴァージンロードである。しかしこのヴァージンロードは、キリスト教とは全く関係が無い。そもそも教会堂は礼拝の場であり、結婚式に必要な施設や場所、物品は存在しない。ウエディングチャペルがヴァージンロードと呼ぶ道は、キリスト教会では「礼拝堂の通路」以外の意味を持たない。わが国のプロテスタント教会では、結婚式の時に通路に敷く白布をヴァージンロードと呼ぶが、カトリック教会では、典礼学に照らし意味のない白布を用いず赤や緑色の絨毯を敷くケースが多い。確かにアメリカでは、わが国と異なり、プロテスタント教会でもカトリック教会でも結婚式では通路に白布を敷く。われわれは、わが国のプロテスタント教会の多くがアメリカの宣教師によって伝道された経緯から、同国で用いられる白布を使う習慣が移入されたものと推察する。他方カトリックはローマを中心としているため、アメリカのカトリック教会で行われる習慣が直輸入されることは無かったのだろう。また、1759年に行われた、初代アメリカ大統領ジョージ・ワシントンの結婚式では白布が使われていない(木田, 1998:127)ことから、通路に白布を敷く習慣に長い伝統は無いと思われる。さらに木田は、中央通路に白布を敷く習慣の発生について、聖書の申命記22章13節の記述<sup>(26)</sup>、すなわち新婚初夜に新婦が処女かどうか確認する白いシャツが転じたのではないかと述べた。アメリカで男女の性関係が奔放となる反動で、敬虔なキリスト者が純潔の主張を強め、教会結婚式で白い布を敷く習慣を急速に広めたのだ(木田, 1998:164-166)。

こうしたわれのヴァージンロードを「ゼクシネット」(首都圏)で語彙検索してみたところ、25014件ヒットした。そのほとんどは挙式・披露宴/披露パーティ施設のプランナーブログでの語彙ヒットで、ヴァージンロードの意味解説と長さや意匠を誇るものであった。「チャペルの入り口から祭壇に向かう中央の通路に敷かれた布の事」と正解を述べた後、「花嫁の汚れない純潔さを象徴し神の前で二人が導かれて結ばれる事を意味します」(伊勢山ヒルズ\_ベストブライダルグループ:2015年5月8日)と上述の聖書の解釈と独自の解釈を折衷するものや、「ヴァージンロードには、『誕生・誓い・旅立ち』の3つの意味があるんです。(略)ヴァージンロードにはこの世に生を受けてから、おふたりが出会い輝かしい未来を表現した神聖な道なのです」(アーフェリーク白金\_TAKE and GIVE NEEDS:2015年3月18日)などヴァージンロードの長さや移動といった空間軸に新婦あるいは新郎新婦の人生という時間軸を重ねた説明もある。また、「1万個のブリリアントカットが施されたクリスタル煌めく20mのヴァージンロード。ヴァージンロードには一際大きな涙型のダイヤモンドがございます。そこに描かれているメッセージ“The future to shine begins from here Together forever”これは、ご新郎様とご新婦様が共に手を取りあい、これからの一步を踏み出す貴重な瞬間に“これからお二人で歩む人生が煌めきに溢れ明るい未来を共に進んでいきますように”と願いを込めております」(ブリリアント・ザ・銀座\_Brillia Wedding:2015年5月16日)などもあり、多くの施設でウエディングチャペ

---

える歩調。例えば、右足から歩む場合は、右・左、左・右…と足を運ぶ。これはゆっくり歩くことで、新婦がドレスの裾を踏んでしまった場合でも一歩下がれば足を外すことができるという配慮から生まれたといわれる。

(26) 申命記22章13節「処女の証拠」では、結婚を解消したい夫(新郎)が、妻(新婦)が処女で無かったことを理由にした場合、その真偽を初夜のシャツで示す。夫が嘘をついていたら銀100シェケルの罰金を払った上で結婚を継続しなければならない一方、妻が処女で無かった場合は町の人々から石を投げつけられて殺されてしまう。旧約聖書によれば、新婦が処女であるか否かが重要な意味を持っていた。

ルの通路に、宗教とは無関係の独自の解釈による何らかの意味付けを行っている。

## 5. キッチュの考え方

### 5. 1. キッチュ論

人は、日常・非日常を問わず物と関わりながら生活する。アブラハム・モルは、こうした関わりあい方の1つのタイプを「キッチュ」で解題した。キッチュは実体の物そのものというより、人と物の関係の態様であり、比喩するなら名詞でなく形容詞である。しかもそこには「美的な」という限定が施される(モル, 1986:29)。本章では、前章までで述べたような、宗教に関係のない独自解釈の多い、そんなわが国のウエディングチャペルやそこで行われるキリスト教結婚式についてキッチュの概念を用いて論攷する。

モルによれば、キッチュという語は「本物でない物」、「倫理的にみて不正な物」を含意する。この語は19世紀に誕生するが、それはちょうど人工的になった人間社会、すなわち市民社会の大衆化が進んだ時代であった。ゆえにキッチュの担い手は平均的市民層であり、彼らは物を所有し使用する喜びや楽しみをささやかに享受して幸福感を得た。

他方でキッチュはシンプルなことを嫌い、日常生活を、一連の装飾的な儀礼によって心地良いものにしようとする。こうした儀礼は洗練された複雑さを与え、高度な文明の証左といえる遊びを日常の生活に持ち込む。これはキッチュが独特な社会的機能を果たすものといって良く、そうした機能は物に付加され、終いには機能さえも変質させる。すなわち、心地よいもの全てに共通する要素が、キッチュの本質であり、最も重要な情緒である(モル, 1986:21, 25-26)。

米国の前衛運動家クレメント・グリーンバークは1939年に、1930年代の文明状況を基に、前衛＝アヴァンギャルドとキッチュを対比させながら論じた。当時、小市民やホワイトカラー・ブルーカラーとして都市に定住した農民出身者たちは、能率向上のため識字に努めたが、都市の伝統文化を味わうに必要な余裕を持ち得なかった。しかしながら、いつしかこうした大衆層は、出身地の習俗を退屈なものと感じる能力を備えるようになり、彼らの新しい需要を満たすために新商品が市場に提供された。それは本物の文化価値に対して無感覚で、特定の文化のみが提供する、大衆のために用意されたキッチュという代用文化であった。キッチュは文化的伝統の中で発見したことを独自の目的に転用する。文化的伝統から入り、企み、経験則、テーマを借用し、1つの独自の体系に変換し、使用しないものは棄てる(グリーンバーク, 2005:10-11)。また、グリーンバークはアヴァンギャルドが芸術の過程の模倣であるとするなら、キッチュは芸術の結果を模倣することと考えた。そして次のようにまとめる。「この対立の整然なさまは、ただ考えて作り出されるものではない。それは、アヴァンギャルドとキッチュという同時に存在する文化現象をそれぞれ隔てている途方もない大きな距離に対応するし、かつその距離の定義ともなっている。次にこの距離は、濃淡さまざまの度合いの大衆化した『モダニズム』や『モダニズム的』なキッチュの全てを弄したところで埋められないほど大きい。それは社会的距離に対応する。その社会的距離は文明社会のどこでも公式の文化の中に常駐するもので、かつその二つの境界線はその与えられた社会の安定度の増減に対して一定の関係をもって交わったり、分かれたりする。一方の側にあるのは常に少数の権力者-そしてそれゆえに教養人-またもう一方

の側は搾取されている貧者-そしてそれゆえに無知な人々-である。正式の文化は常に前者に属しているのに反し、後者は民衆文化とか、幼稚な文化とか、キッチュで満足しなければならなかった」(グリーンパーク, 2005: 17)。

## 5. 2. ウエディングチャペルとキッチュ

日本語で「<sup>いかもの</sup>如何物」, 「通俗物」と訳されたキッチュ (kitsch) という語を, ドイツ語読みで初めて使用したのは石子順造である。石子は, 辞書で引いたこの語の意味を, 手をパチンと合わせて物事を雑にでっちあげること, 通りの泥をかき集めること, それらが転じて大衆趣味に迎合した物, と説く。具体的に何を指してキッチュとしているのかというと, たとえば, 銭湯の洗い場にあるペンキ絵, エッフェル塔を模倣した東京タワー, 三島由紀夫が私財を投じて創設した楯の会の制服などである。都内の一般公衆浴場数が全盛時の四分の一を割り込み700軒<sup>(27)</sup>となり, 2012年に新電波塔東京スカイツリーが建ち, 三島事件<sup>(28)</sup>から45年を経ると, いずれも石子が活躍する1970年代を反映したものであり色あせた感拭えないが, なるほど, アヴァンギャルドな視点からは顧みられないものだと思えてきよう。モーレッツに働くことで, 終戦からの復興とそれに続く高度経済成長を経験し, わが国全体が豊かになる過程でキッチュを受容した時代が70年代といえるのではないだろうか。そして, 初めてホテル建物内部に, つまりビルトインタイプのウエディングチャペルが常置されたのも70年代<sup>(29)</sup>であった。

ブルーノ・タウトは, 建築学的立場から本物に対する「いかもの」(キッチュ) という二項対立で日本建築に分析を加えた。著書『日本の家屋とその生活』は, 建築にとどまらず文化全体にまで施した分析と批判とを, 本人の眼で見たものだけしか記述しないという信条に従って書かれた。最終第12篇の「永遠なるもの」は, 彼が最も愛した桂離宮がすなわち「永遠なるもの」の象徴として描かれる。同行者とともに観た御殿広縁からの景観を「私たちは今こそ日本をよく知り得たと思った。しかしここに展げられている美は理解を絶する美-即ち偉大な芸術の持つ美である。すぐれた芸術品に接するとき涙はおのずから眼に溢れる。ひとはこの神にもたぐう謎のなかに, 芸術は美に単なる形の美ではなくてその背後に無限の思想と精神のつながりとの存することを感得する」(タウト, 2008: 336-337) と賛美する。これに対して, 同じく京都にある修学院の千歳橋を環境に似つかわしくない「將軍趣味」, また桂離宮造営と時同じく造営された日光東照宮を「野蛮なまでに浮艶な社廟」(タウト, 2008: 352) と酷評した。千歳橋はシナ風の, 他方東照宮はごてごてとしたバロック風の, つまり前者は中国風で後者がヨーロッパ風の安価な模倣に通じるものとしてキッチュであると指摘している。

独立型ウエディングチャペルの多くは, ヨーロッパの大聖堂で見られるゴシック様式

(27) 東京都総務局がまとめる『東京都統計年鑑』では, 1989(平成元)年の「一般公衆浴場」が1976軒であるのに対し, 2013(平成25)年は707軒である。また, 1970年の「公衆浴場」は3255軒であった。本稿執筆中の2015年7月4日付「朝日新聞・夕刊」は, 本年5月末の都内の銭湯(一般公衆浴場)が644軒と報道している。

(28) 1970年11月25日, 三島と楯の会メンバー4名が自衛隊市ヶ谷駐屯地に入り, 自衛官に対して憲法改正のための決起を呼び掛けた。呼応する自衛官のいないことを認め, 同地で割腹自殺した事件。

(29) 1975年に, 京王プラザホテル(東京都新宿区)に, 本邦初の常設型でビルトインタイプのウエディングチャペルが設けられた。

を多用する。中世ヨーロッパでは、ローマ帝国の崩壊後、キリスト教を拠り所とする世界観が敷衍し、宗教空間も影響を受けるかたちでフランスにおいてゴシック様式が誕生した。ゴシック様式は、「ある種の恍惚的古典主義-古代文化の流れを汲む円柱やアーチをモチーフに、工学の発達によって可能となったキリスト教神秘主義的上昇感を組み合わせたスタイル-を体現」(マクナマラ, 2012: 35) し、それまでの古典主義とは違った建築様式としてヨーロッパ各地に流布する。その結果、パリのノートルダム大聖堂のように、尖頭アーチ<sup>(30)</sup>やステンドグラスが配された大聖堂がヨーロッパ各都市の中心地に建った。またこの様式は「恍惚的」と先に記されたように、石彫装飾を柱や梁あるいは雨樋などに多用する。欧米諸国のキリスト教会堂に古典主義が少なくないにもかかわらず、ゴシック様式がキリスト教会をイメージさせるデザインとして用いられた。

ウエディングチャペルで執り行うキリスト教結婚式は、教会堂内部を模した結婚式場＝ウエディングチャペルが会場となる。ウエディングチャペルでは教会堂内部の特徴を、凝った意匠の十字架、燭台が配置された祭壇、壁のステンドグラス風窓、白布が敷かれたヴァージンロードに集約し再現する。こうした事情は、単独の建築物として建つ独立型でも、ホテルや専門式場の建物内部に建つビルトイン型でも基本的に同じ思想で貫かれており、それぞれ教会堂建築の様式区分には執着しない。重要なことは欧米のキリスト教風と感じられることで、本物の教会で用いられているか否かは別の問題となる。

キリスト教の教義に照らし合わせて教会建築を示した『教会建築』(1985)が日本基督教団出版局から刊行されている。カトリックでは、1962年から1965年に行われた第2ヴァティカン公会議の典礼憲章で、教会建築は新しい典礼を機能させる場所として位置付け、歴史的な様式美の建築観念を捨てた。他方プロテスタントでは、第二次大戦後に欧州各都市で順次開催された教会建築協議会で、礼拝空間として教会を規定している。ウエディングチャペルが求めるのは、イメージとしての様式建築であったり、信仰に関係しない建物であるにもかかわらず象徴として十字架を配したり、倫理的な不正さが否めない商業施設としてのキリスト教風味である。

他方、キリスト教義上意味を持たないヴァージンロードが、ウエディングチャペルにおいて拝跪される理由は何のようなことか。われわれは、これを舞台から客席を縦断するように同じ高さで張り出した舞台装置である花道と同質ではないかと考える。歌舞伎や日本舞踊を催す劇場では、役者あるいは踊手が舞台上に出入りするためにこれを使う。花道を、舞台というべきウエディングチャペルの祭壇に行き来する際の「ロード」と考えると、この解釈が成立する。つまり花道に、建物同様キリスト教風味の意味付けを行った装置ということである。参列者から見て二次元的な舞台＝祭壇から、芝居の主役である新郎新婦が参列者の側を通り三次元的な演出を可能にするのがヴァージンロードで、結婚式のためのキッチュな舞台装置といえよう。

---

(30) 半円アーチよりも強度が高く、幾何学的なプロポーションとともにデザインされることが多い。

## 6. 結言

宗教学者のマーク・R・マリNZが、日本におけるキリスト教の役割を論じた。「キリスト教だけを信奉する日本人は依然稀だが、近年大勢の人々が、伝統的な分業体制でキリスト教（日本人の好むかたちのキリスト教）の儀礼がひとつの役割を演じることを受け入れはじめています。…今日キリスト教会は、日本における宗教間の分業の中で、結婚式という役どころを奪いあう手ごわい競争相手になっている」と指摘し、続けて「若者のあいだではキリスト教式の結婚式の人気が高まり、キリスト教につきまとうスティグマが薄らいでいる可能性が窺える。…理由はどうであれ、細分化された区割りに押し込められてはいても人気の高いこの役割を演じることによって、キリスト教は日本の民俗宗教複合体のなかに足場を築きつつあるようである。この『キリスト教』結婚式の風潮には、現代社会の通過儀礼に別の宗教伝統を自然に流用する日本の手法が表れている」（マリNZ, 2005: 254）。

ここに摘記したように、現代のわが国の結婚式スタイルは、キリスト教式が人気を博する。これは、90年代にそれまで主流であった神前式を超えて以来継続する。そしてそのスタイルを実践する場がウエディングチャペルであり、われわれはそれをキッチュなものとして評した。世俗的な目的でつくられた商業施設でありながら、宗教的なモチーフに頼り、その宗教的モチーフを貶めているキッチュな建築物という主張である。

ウエディングチャペルを利用してブライダルサービスを提供あるいは消費する人々は、自らのチャペルが、「如何物」と訳されるキッチュであるなどとは全く意識していないだろう。きっと、自分たちのやっていることは、「正統で正式なキリスト教結婚式」だと考えている。われわれは、あのウエディングチャペルに象徴されるわが国のキリスト教結婚式が、生活や文化と宗教が相互にわたりあって、まさしく日本的な、独自の発達を遂げた表現だと考える。そしてそれは、つまるところ「キリスト教」とは呼ばれない。あまつさえ十字架の装飾を施した商業施設をチャペルと呼ぶこと、それは不穏当な、何かそぐわない感じの否めない組み合わせである。しかしながら、たとえそれが神やイエス・キリスト、キリスト信者を冒瀆することに繋がろうとも、それはキッチュの原則に従い生じた組み合わせなのである。

本稿では、わが国で主流のキリスト教結婚式やそれをするウエディングチャペルをキッチュとして考察した。しかしわれわれは、キリスト教結婚式にとどまらず、明治期の神前結婚式の創案、ビルトインした神前結婚式場の発案、専門結婚式場や神社併設の結婚施設の設置など、実はわが国ブライダルサービスの多くがキッチュなものだと考えている。次稿では、そのように考えた理由を説明してみたい。

モルは前掲書の中で宗教とキッチュの関係をいみじくも言い表している。最後にそれを記し本稿を閉じる。

「キッチュが表れてくる様々な領域のうち、最も大きなものの一つが宗教的なキッチュである。世俗とかかわりあう宗教は、人間の美的な感受性を利用するという長い伝統を持っている。効率よく多くの人に訴えかけるためには、人間の美的感受性を利用せざるをえないのであり、そのためには、多数の人の潜在的な欲求にそった芸術形式であるキッチュを受け入れざるをえない」（モル, 1986: 51）

## 参考文献

- Abraham Moles (1977) 『Psychologie du Kitsch, l'art du bonheur』, nouvelle edition revise par Elisabeth Rohmer (アブラアム .A. モル『キッチュの心理学』万沢正美, 1986, 法政大学出版局)
- Bruno Taut (1936) (ブルーノ・タウト『日本尾家屋と生活』復刻版, 篠田英雄訳, 2008, 春秋社)
- Clement Greenberg (1939) 「Avant - Garde and Kitsch」Partisan Review (クレメント・グリーンバーグ「アヴァンギャルドとキッチュ」藤枝晃雄訳, 2005, 勁草書房)
- Denis R.McNamara (2011) 『HOW TO READ CHURCHES』, Ivy Press (デニス・R・マクナマラ『教会建築を読み解く』田中敦子訳, 2012, ガイアブックス)
- Mark.R.Mullins (1998) 『Christianity made in Japan』, University of Hawai'i Press (マーク・R・マリンス『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』高崎恵訳, 2005, トランスビュー)
- 『朝日新聞』1879年1月26日, 1881年4月15日, 1886年9月12日, 1974年10月22日(朝日新聞社『聞蔵Ⅱビジュアル』)
- 『朝日新聞-夕刊』2015年7月4日
- 朝日新聞社編(1997)『朝日新聞記事に見る恋愛と結婚〔明治・大正〕』朝日文庫
- 五十嵐太郎(2007)『結婚式教会の誕生』春秋社
- 石井研士(2005)『結婚式 幸せを創る儀式』日本放送協会出版
- 石井研堂(1944)『改訂増補-明治事物起原』春陽堂(明治文化研究会1996, 日本評論社)
- 石子順造(1986)『キッチュ論-石子順造全集Ⅰ』北冬書房
- 石子順造(2011)『マンガ／キッチュ-石子順造サブカルチャー論集成』小学館クリエイティブ
- 今井重男(2014a)「リゾートウエディングの地としての軽井沢の軌跡 - 国際避暑地誕生とキリスト教会結婚式に注目して」『千葉商大論叢』第51巻・第2号
- 今井重男(2014b)「近代婚礼創作とブライダル・ビジネスの源流」『千葉商大論叢』第52巻・第1号
- 今井重男(2015)「江戸時代の結婚習俗とそのビジネス性」『千葉商大論叢』第52巻・第2号
- 今道友信(1984)「1概観-正用美学の流れ」(『講座美学』第1巻, 今道友信編著, 1984, 東京大学出版会)
- 尾關方外(1937)『故實と新式日本婚禮式』文祥堂
- 片木篤(1988)「あこがれのウエディング・ショー-結婚の儀式と空間」(『季刊へるめす』15号, 岩波書店)
- 香山壽夫(1997)「今日のキリスト教会堂について」(『新建築』1997年2月号, 新建築社)
- 木田砂雪(1998)『結婚式の解剖実習—誰も知らなかったキリスト教結婚式の真実と愛』日本図書刊行会
- 共同訳聖書実行委員会(1987, 1988)『聖書-新共同訳』日本聖書協会
- 三省堂百科辞書編集部(1937)『婦人家庭百科辞典』三省堂(2005復刻版, 筑摩書房)
- 『宗教統計調査-平成26年版』文部科学省
- 『ゼクシネット』<http://zexy.net/wedding/shutoken/20150627>

『ゼクシィ結婚トレンド調査2014』（首都圏）

[http://bridal-souken.net/data/trend2014/XY\\_MT14\\_report\\_06shutoken.pdf](http://bridal-souken.net/data/trend2014/XY_MT14_report_06shutoken.pdf)

高橋保行, 土屋吉正, 長久清, 加藤常昭, 奈良信, 岩井要 (1985) 『教会建築』日本基督教団  
高群逸枝 (1963) 『日本婚姻史』至文堂

玉置一成 (1916) 『故實と新式日本婚禮式』岡田文祥堂

帝国ホテル (1990) 『帝国ホテル百年史』帝国ホテル

『東京都統計年鑑』東京都総務局 <http://www.toukei.metro.tokyo.jp/tnenkan/tn-index.htm>

『日本婚禮式下巻』（1896年）東洋堂（『風俗画報』113号）

日本カトリック司教協議会常任司教委員会 (2010) 『カトリック教会のカテキズム要約』カ  
トリック中央協議会

日本基督教団信仰職制委員会編 (2006) 『日本基督教団式文（試用版）主日礼拝・結婚式・  
葬儀諸式』日本キリスト教団出版局

平出鏗二郎 (1898) 『東京風俗志』富山房 (2000 復刻版・筑摩書房)

柳田國男 (1948) 『婚姻の話』岩波書店

(2015.7.18 受稿, 2015.8.10 受理)



## 〔抄 録〕

現代のわが国の結婚式スタイルは、キリスト教結婚式が人気を博する。この状況は90年代に神前式を超えて以来継続する。しかし、キリスト教信者数は人口のわずか2.3%であり、このことは信仰の表明ではない。つまり、自覚的信仰の介在しない、しかしキリスト教を拠り所とした結婚式の拡大である。このようなキリスト教結婚式で挙式する場所のほとんどはキリスト教会ではない。ホテルや結婚式専門式場の建物内部にビルトインされた、あるいはそれらの敷地内に独立して建つ建物などで挙式を執り行う。本稿では、キリスト教結婚式を行う会場のうち、信者を持たず、礼拝などの典礼を行わず、結婚式のためだけのこの施設を「ウエディングチャペル」と呼び、同施設をキッチュなものとして評した。世俗的な目的でつくられた商業施設でありながら、宗教的なモチーフに頼り、しかもそれを貶めているキッチュな建物という主張である。

われわれは、ウエディングチャペルに象徴されるわが国のキリスト教結婚式が、生活や文化と宗教が相互にわたりあって、まさしく日本的な、独自の発達を遂げた表現だと考える。そしてそれは、つまるところ「キリスト教」とは呼ばれない。あまつさえ十字架の装飾を施した商業施設をチャペルと呼ぶこと、それは不穏当な、何かそぐわない感じの否めない組み合わせである。しかしながら、たとえそれが神やイエス・キリスト、キリスト信者を冒瀆することに繋がろうとも、それはキッチュの原則に従い生じた組み合わせなのである。